

〈研究・調査報告〉

## 日本語教育支援を通じた地域連携 —山武市日本語教室担当者会議における講習会を例に—

本 城 美和子 ・ 佐 藤 明 子

### 【要旨】

近年、地域の公立学校において日本語指導が必要な児童生徒数は急激に増えている。2021年の統計時点で6万人に達しようという勢いである。千葉県山武市においても外国籍住民がここ約10年で3倍近くに増えており、なかでもスリランカ人が突出して多く、外国籍児童生徒の80%以上をスリランカ人児童生徒が占めている。急増する外国籍児童生徒への日本語支援は急務であり、城西国際大学と山武市教育委員会は、2023年1月18日に山武市の外国籍児童生徒への日本語教育支援に係る連携協定を締結した。そこで、山武市日本語教室担当者会議において、筆者を含め6名の本学日本語教員が日本語指導に関わる講習会を行っている。

その中で第3回講習会は、実践的な日本語教室の事例紹介をしつつ、日本語教育の基本的なツールや指導方法を確認した。講習会後の参加者へのアンケートからわかった現状と、見えてきた課題を考察する。第4回は第3回の結果をもとに、より具体的かつ実践的な活動を行った。それにより気づいたことを考察する。

キーワード：外国籍児童生徒、地域における日本語教育、地域連携、多文化共生

### 1. はじめに

多文化共生という言葉が使われるようになって久しい。総務省が「地域における多文化共生推進プラン」を初めて策定したのは2006年のことである。2020年には社会経済情勢の変化を踏まえ改訂が行われ、日本語に関しては、「日本語及び日本社会に関する学習支援」から「日本語教育の推進」という表現に変わった。とはいえ、日本語サポートのための施策が大事な柱の一つであることには変わりないだろう。

城西国際大学が位置する東金市のとなり、山武市においても外国籍住民が急増しており、日本語教育支援が急務となっている。そこで、城西国際大学は山武市教育委員会と、2023年1月18日に山武市の外国籍児童生徒への日本語教育支援に係る連携協定を締結した。それをうけ2023年4月から、山武市教育委員会が毎月行っている「日本語教室担当者会議」において、本学の日本語教員らが、講習会を行うことになった。対象は山武市で外国籍児童生徒の支援に

係る人たちを主とし、講習会は、全12回の予定で行われている。

本稿は、すでに行われた2023年度前半の講習会のうち、特に実践的な日本語指導にフォーカスを当てて行った第3回と第4回についての報告であり、講習会を通して見えてきた課題と、今後への可能性を考察するものである。

## 2. 講習会概要

### 2.1 講習会の背景と目的

文部科学省の「日本語指導が必要な児童生徒の受け入れ状況等に関する調査」<sup>1</sup>によると、公立学校における日本語指導が必要な児童生徒数は右肩上がりに推移し、令和3年（2021年）の時点で58,307人となっている。これは平成24年（2012年）の33,184人の1.8倍増、つまり約10年間で2倍近く増えていることになる。そのうち外国籍児童生徒数は47,619人と全体の80%強を占めている。

千葉県山武市においても、外国籍住民の数は増えており、平成24年（2012年）10月に666人だったものが、令和5年（2023年）10月には1,739人と約10年で3倍近く増えている<sup>2</sup>。中でもスリランカ人が急増しており、山武市に住民登録するスリランカ人は、2013年4月の57人から2023年2月の750人となっている<sup>3</sup>。それに伴い近年、母国から家族を呼び寄せる形でスリランカ人児童が急増し、2023年9月時点で山武市の小中学校に通うスリランカ人児童生徒は66名（外国籍児童生徒数合計80名）に上る<sup>4</sup>。そのうち約25%が中学校、残りの75%が小学校に通っている。

しかし、その多くが日本語レベル1「日本語がわからない（聞く・話すができない）」或いはレベル2「生活で意思疎通ができるが、学習では厳しい」とされている。そのため外国籍児童生徒の支援、とりわけ日本語支援が早急に必要な状況にあり、山武市では市内のいくつかの小中学校で、いわゆる在籍学級から取り出して日本語指導を行う日本語教室を開設する、などの取り組みが始まっている。山武市は、外国籍児童生徒の80%以上がスリランカ人であるという特有の状況にあること、また、教育委員会の職員の話によると、スリランカ人児童生徒は、出入りが激しいとのこと、などから日本語指導においても状況に見合った対策が必要な状態にある。

### 2.2 講習会の実態

本講習会は2023年4月にスタートし、山武市教育委員会が主催する「山武市日本語教室担当者会議」の中で行われる形で、毎月1回のペースで開かれている。参加者は、回によって多少変動するが、本学の教職員数名を含め、概ね15名前後である。講習の主な対象者は、外国籍児童生徒の支援に係る人、中でも特に山武市内の小中学校4校で外国籍児童生徒の日本語指導に携わる支援員等（山武市の教育支援員は外国人児童生徒の生活指導、保護者への連絡、日本語の取り出し指導に携わっており、以下、本稿では支援員と呼ぶ。）及び山武市教育委員会の職員となっている。講師は、本学で日本語教育に携わる教員6名で担当し、各月の担当教員

が多方面から日本語指導にアプローチする形で講習を行っている。本報告書で取り上げる第3回は本城、第4回は佐藤が担当した<sup>5</sup>。

### 3. 第3回講習会

#### 3.1 第3回講習会の概要

第3回講習会は2023年6月28日、山武市役所において行われ、参加者は本学の教職員を含め15名であった。

##### 〈第3回講習会の主な内容〉

#### (1) 外国籍児童生徒教育の現状についての概要説明

- ・公立学校における日本語指導が必要な児童生徒数の推移
- ・日本語指導が必要な外国籍及び日本国籍の児童生徒数の推移
- ・日本語指導が必要な児童生徒の学校種別・都道府県別在籍状況
- ・帰国・外国人児童生徒に対する日本語指導の現状  
(児童生徒の言語の多様化及び集住化・散在化の傾向状況)
- ・特別の配慮に基づく指導、及び「特別の教育課程」による教育指導を受けている児童生徒の割合状況

#### (2) 実践的な日本語教室の取り組み事例紹介

日本の外国籍児童生徒数を都道府県別に見ると、最も多いのは愛知県であり、2番目が神奈川県、そして東京都と続く。これら上位の都府県に加え、早くから外国籍住民が多い群馬県などでは、外国籍児童生徒への日本語支援活動においてもさまざまな取り組み実績がある。それらの取り組み事例の中から、日本語レベル別に3つの活動紹介動画を見、その中で使われている日本語指導の基本的なマテリアルやレアリアの使用法、また日本語学習を行う際の活動方法の確認などを行った。この(2)が第3回講習会のメインであり、具体的な内容は次節で詳しく説明する。

#### (3) スリランカ人学生の指導経験談

本学の留学生別科にも、一時期多くのスリランカ人学生が在籍し、日本語を学んでいた。彼らの日本語教育を担当した経験から、特にスリランカ人学生に有効と思われる学習方法の提案や、情報共有を行った。

#### 3.2 実践的な日本語指導紹介

先述したように、事例紹介は3レベル、3つの事例を紹介し、各教室で取り入れられている基本的な指導方法や使用教材の確認・説明を行った。

### 【事例1】愛知県豊川市「こぎつね教室」

レベル：日本語初歩

対象：小学生

形態：少人数グループ

この事例では、注目ポイントとして、まず「絵カード」「フラッシュカード」「絵本」を挙げた。日本語初歩というのは、単語単位で多少話せる程度である。日本語を学び始めた初期段階の児童に対し、基本的な道具類をどのように効果的に使用しているか、という点に注目してもらった。また、このレベルの小学生をグループで教える際に、「児童同士で教え合う」「体を動かす」といったポイントを確認した。

### 【事例2】神奈川国際交流財団「国際教室」

レベル：日本語初級

対象：小学生

形態：個別・少人数（2人）

事例2においては、「絵カード」「文字カード」「レアリア・生教材」の使い方に注目してもらった。一口に「絵カード」といっても多様である。対象学習者のレベルによって使い方や種類の違いに気づいてもらうこともねらいの一つであった。また、身近にあるものを使用した指導方法もポイントとして挙げた。さらに、日本語の理解を確認するために、児童に「アクションさせる」「実際に行動させる」といった方法の有効性について確認した。

### 【事例3】群馬県伊勢崎市 日本語指導研究協議会による「日本語教室」

レベル：日本語初級～中級

対象：中学生

形態：グループ

事例3では、「ペアワーク」「インタビュー」といった学生同士、或いはクラス外へとつなげる活動にフォーカスし、その有効性・学びの可能性を紹介した。また、レベル・対象に合わせ、「覚える」から「考える」へ発展させることの大切さ、「考える力」が身に付くような活動の重要性を確認した。

## 3.3 講習会後のアンケートの目的と内容

講習会后、山武市日本語教室にかかわる参加者に、アンケートに答えてもらった。今回のアンケートの主たる目的は、基本的な現状を把握することであった。そのため、今回は日本語教室にかかわる参加者が、日本語指導をどのような形で行っているか、その様子を知るための入

り口的な質問にとどめた。アンケートはgoogle formと紙媒体を併用し、回答形式は一部の自由記述をのぞき、選択式複数回答可で行った。アンケートの主な内容項目は以下の5つである。

- ① 日本語教室の基本情報
- ② 紹介した日本語指導で使われる道具の使用経験について
- ③ 紹介した日本語指導方法の実践経験について
- ④ 紹介した日本語指導で使われる道具・方法の中で、今後取り入れてみたいと思った道具・方法について
- ⑤ 日本語教室で感じている主な困難点

### 3.4 アンケート調査結果と考察

アンケートの有効回答数は8名であった。

表1 ①日本語教室の基本情報について

〈1人で一度に対応する児童生徒の数〉		
1人	2・3人	4～10人
4名	8名	2名
〈指導形式〉		
マンツーマン	少人数グループ（2・3人）	5人以上グループ
4名	7名	2名

(筆者作成)

複数回答を可としたため、ほとんどの人が複数選択をしており、児童生徒の数や形式は、流動的であること、臨機応変な対応が求められていることがうかがえる。大学や日本語学校の授業のように人数や指導形式がほぼ決まっているのとは、大きく違う点である。

表2 ②・③道具の使用経験及び指導方法の実践経験について

〈取り入れている使用道具（使用経験）〉			
絵カード	文字カード	レアリア・生教材	絵本
8名	7名	7名	3名
その他（回答より一部抜粋）：トランプ・ビンゴ・すごろく・算数ドリル・プリント練習帳類			

〈取り入れている指導方法（実践経験）〉			
体を動かす （実践・アクション）	児童で教え合う	ペアワーク	インタビュー
5名	6名	6名	3名

(筆者作成)

表3 ④今後取り入れてみたい道具・方法について

〈今後取り入れてみたい道具や指導方法〉			
文字カード	絵本	アクション	インタビュー
3名	4名	3名	3名

(筆者作成)

表2からわかるように、絵本以外はほとんどの人が使用経験がある、という結果であった。「その他」の自由記述において、さまざまなマテリアルを使用していることも確認できた。また、指導方法においてもインタビュー以外は取り入れている人が多数派である、ということがわかった。その結果、表3が示すように、今後取り入れてみたいという思う道具や方法で、特別多いものはなかった。既に取り入れているため当然の結果だと言える。②③に関する質問の結果は、筆者が予想していたよりも多くの人々が基本的な道具・方法をすでに取り入れているというものであった。

表4 ⑤日本語指導をする際に感じている困難点

一度に対応する児童のレベル差	7名
児童同士の仲が悪い	2名
児童は話せるが文字が読めない・書けない	6名
使用テキストがうまく活用できない	2名
児童が日本語学習に興味を持たない+集中力がない	6名+1名

(筆者作成)

ここで気になったのは、「児童が日本語学習に興味を持たない」と答えている人が多かったことである。「レベル差」や「文字」に関する困難が多いことは、本学でスリランカ人学生を教えた経験などから、予想通りの結果であった。しかし、「日本語学習に興味を持たない」という困難を選ぶ人が、ここまで多かったのは予想外であった。確かに、児童の複雑な来日背景などから、モチベーションに影響のあるケースなどもあるだろう。とはいえ、さまざまな道具や方法を使い指導を行っているにもかかわらず、児童のやる気につながっていない、日本語学習に関心を持たせることができていない、というのは非常に残念である。

今回のアンケート結果を見ると、基本的な道具や指導方法はすでに取り入れ使用はしているものの、それを最大限活かせていないのではないかと考えられる。今後は、さまざまな道具の効果的な使い方、児童に興味を持たせるような指導方法など、より具体的かつ実践的な講習内容が求められているのではないかと、と思われる結果であった。

## 4. 第4回講習会

### 4.1 第4回講習会概要

第4回講習会は2023年7月13日、のぎくプラザ会議室1にて行われ参加者は本学教職員を含め15名であった。

#### 〈第4回講習会の主な内容〉

##### (1) これまでの講習会の振り返り

第1回から第3回目の講習会では、現在の外国人児童生徒の教育の現状や他地域での取り組みに触れ、参加者自身の経験を振り返った。問題点や疑問点を視覚化し共有していき、回を重ねるごとにより実践的な例に触れてきた。第4回では、これまでに実施された講習会から、実際に取り入れた活動があったか、講習後に改めて疑問を持った点等について共有し、普段の実践についてその具体的な内容や指導方法を参加者同士で紹介し合った。

##### (2) 多様性に応じた指導の情報共有

文科省が公開している研修用動画コンテンツ3「日本語指導の方法1」をもとに、以下3点を中心に、担当している児童生徒の日本語レベルに合った項目を、実践例から指導計画、学習項目、言語活動の設計をどのようにしているか、どうすればよいのか、指導を振り返りつつ、より良い方法を探った。

- ・ サバイバル日本語プログラムの指導内容・方法
- ・ 日本語基礎プログラムの指導内容・方法
- ・ 初期段階の日本語の指導の留意点

##### (3) 『たのしいがっこう』を使って活動につなげるための実践

外国人児童生徒用日本語指導テキスト『たのしいがっこう』は日本語指導が必要な外国人児童生徒が一日でも早く学校生活へ適応できるよう作成されたものである。挨拶をはじめ、身体の調子、持ち物など全10トピックある。また、多様化する児童生徒の背景に合わせて24言語の翻訳があり、無料ダウンロードして使用できる教材である。

講習のまとめ活動として、「すぐに実践できるひと工夫」を目的に据え置き、「9じかんわり」の英語版を取り上げ、参加者を児童生徒に見立て、練習活動を実施することにした。使用したのは、授業科目名(34ページ)と空欄の時間割表(36ページ)である。具体的な活動内容と流れについては、4.3に示す。

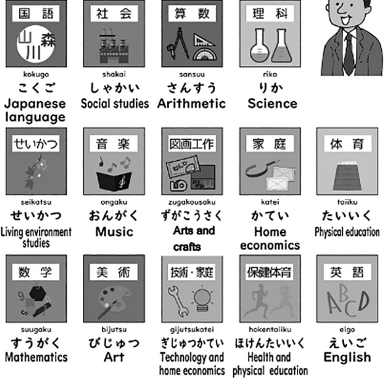


9 jikanwari  
じかんわり

Class schedule

Nijikanme wa nanno banyou desuka.  
2じかんめ は なんの べんきょう ですか。  
What subject is it in the second period?

Rika desu.  
りかです。  
It's science.



jikanwari jikanwari  
じかんわり を つくりましょう。 Let's make a class schedule.

時間割表 年組  
Class schedule Grade Class

	げつ 月 Monday	か 火 Tuesday	すい 水 Wednesday	もく 木 Thursday	きん 金 Friday
1					
2					
3					
4					
5					
6					

(東京都教育委員会ホームページ出典)

図 1 「9じかんわり」34ページ、36ページより

## 4. 2 話し合いから見た実践力に関する課題

4. 1 (1) 及び (1) の話し合いから参加者は大きく次の方法で指導にあたっていることが分かった。話す活動では、支援員は割り当てられた学習項目や練習教材(教科書や生教材)を使って質問し、児童生徒が答える活動をよくしている。わからない場合、説明したり、答えを模倣させたりする。聴く活動は支援員からの問いかけによるものがほとんどである。読む活動は、絵本が好きな児童生徒には、本を読ませたり、時にはタスク達成のご褒美として本を読ませるといった活動をしている支援員もいる。書く活動は主に漢字(単語含む)の書きとりである。学年相当の漢字ドリルに書き込むなどしている。この漢字ドリルには訳があるわけではなく、文脈がわかりにくいものも多い。ひらがな表記の個所に漢字を書いたり、漢字一文字を何度も繰り返し書くというものである。書く活動は支援員が最も悩ませている活動でもある。

それぞれの支援員が試行錯誤しながら指導にあたっている様子が伺えた。しかしながら、3. 4でも述べたように、さまざまな道具や方法を取り入れているものの、それは主にインプット中心の活動で、課題を達成することが目的となっている活動が多く見える。特に気になった点は、授業計画に沿った学習内容及び、項目や練習問題を順に解いていったり、支援員からの一方向の問いや指示に対して児童生徒が反応する、答えるというような活動が目立っていて、児童生徒よりも支援員からの発話が多いことである。そして、それぞれの活動を説明してから始めたり、児童生徒が間違えると正答を伝えて終わるなど、児童生徒が思考せずとも、取り組めてしまう点である。これらは、第3回でも課題となっていたモチベーションを欠いてしまう



原因の一つにも感じられた。

より多くのアウトプットややり取りが生まれるような活動につなげるためには、その学習項目はどのような課題や問題が解決できるのか、意味を持たせて実施することが大切である。

### 4.3 実践的な紹介：やり取りの生まれる活動につなげるひと工夫

文部科学省作成の「外国人児童生徒受入れの手引き」では、外国人児童生徒に対する日本指導には児童生徒の滞在期間や日本語習得状況、生活への適応状況などから、サバイバル日本語、日本語の基礎、技能別日本語、教科と日本語の統合学習、国際理解やアイデンティティ及びキャリア形成を支援するといった取り出し授業における基本的な指導内容や指導方法を紹介している。今回の講習会の参加者が指導している児童生徒はサバイバル日本語、日本語の基礎にあたるものが多く、参加者からは特に現場ですぐに実践できる教え方のヒントを知りたいとの要望があった。そのため、既に参加者が使用したことがある教材を活かしながら、4.2の課題をどのように解決できるか、実践を通して、ポイントを紹介した。

学習目標を決め、5つの活動を実践及び、提案した。「内容」には教員（以降Tと表記する）と参加者（生徒役で、以降Sと表記する）の実際のやり取りを示す。「留意点」は発話を促すコツや間違いを訂正する際のポイントを書くこととする。

表5 提案した教案例

学習項目	「なんのべんきょうですか」「(科目名) です」	
学習目標	自分の時間割を作ることができる・何の時間か確認することができる	
準備物	1. 「9じかんわり」の英語版の授業科目名（34ページ）と空欄の時間割表（36ページ）を一組にしたもの 2. 授業科目名（34ページ）を拡大コピーしたもの 3. 「？」と書いた紙	
活動	内容	留意点
1) 目標確認と応答練習を使った単語の導入	T「なんのべんきょうですか」（教師は授業科目と時間割の写真を見せる） S「(科目名) です」（Sは指された科目名を答える） Tが質問し、S全員が答えるという流れから徐々に、Tから各Sをランダムに指していく。	間違えたら、Tが訂正せず、他のSに答えさせたあと、元の学生に戻って言わせる。
2) 反復練習を使った質問の練習	T「なんのべんきょうですか」（「？」を見せる） S「なんのべんきょうですか」（繰り返す） Tは「？」を見せながらS全体から、各Sをランダムに指し、発音の確認をしていく。	発音が気になる場合は、Tが言い直して、Sにもう一度言わせる。

3) 応答練習を使ったS同士のやり取りの練習	T「？」 (「？」を全体に見せて、S1を指し、科目名を指す) S「なんのべんきょうですか」 S1「(科目名)です」  T「S2さん」(「？」を見せる) S2「なんのべんきょうですか」 T「S3さん」(科目名を見せる) S3「(科目名)です」	やり取りを何度か見せたあと、「？」及び、科目名もSをランダムに指す。S同士での応答練習をしばらく続けて、発音や活動の流れをつかむ。
4) 科目名ビンゴゲーム	目標の口頭練習を十分に行った後、科目名入りのビンゴシートを配布し、ラインが揃うと勝つことを見せる。 T「？」(「？」を見せる) S「なんのべんきょうですか」 T「(科目名です)」 (科目名が書かれた教材を一枚選び、答える)	Tは「(科目名)ですね。○をかきます。」などと言いながら、巡回する。科目名を選ぶ役はSに譲る。数名のビンゴ者を出して終了する。
5) 自分の時間割を作成する	T「なんのべんきょうですか」(空欄の時間割表を指す) 各Sは自分の時間割を作成していく。	Tは巡回しながら、文字の確認をしたり、質問しながら、完成を見守る。

(筆者作成)

1) から 3) の活動では主に聞き取りと簡単なパターン練習を取り入れた口頭練習をした。一般的にパターン練習は単調で飽きやすく、文型に焦点を当てているだけの活動と思われがちだが、目標を示す(今回は、「時間割表を作りましょう」)ことで文脈が生まれる。説明がなくとも、今何が起きているのか想像できる点では有用である。また、Tから一方的に問いかけるだけでなく、徐々にSからも質問し、S同士のやり取りに移行させていく点も重要である。そして、Sが間違えた際も直ちに正答を教えるのではなく、暗示的に気づかせるように促すこともできる。活動4)では応答練習形式でビンゴゲームを提案した。答えを求めるために、「なんのべんきょうですか」と質問しなければならない。また、ビンゴシートに書かれた科目名を読まなければ、ゲームは遂行できない。「読む」という活動を特別に取り上げなくても、この活動のような形で自然に「読む」ことを取り入れていくことで抵抗感を低減させることもできるだろう。自分のビンゴシートを書かせてビンゴゲームの準備をさせる活動も、「書く」ことの負担感を減らせるかもしれない。5)の活動では、実際に児童生徒たちが自分の時間割を「書く」練習をして活動目標を達成とする。

以上のように解説を加えながら実践した。1つの課題の中で4技能を連携させて活動をしたり、苦手なものを楽しみの中に取り入れて指導してみたり、できるだけ説明を控えて自身で気づかせるコツなどを中心に行った。

## 5. まとめと今後の課題

まず、第3回講習会のアンケート結果から、実際に日本語教室で行っている活動は、日本語を学ぶという面から見ると、学ぶことの楽しさ、モチベーションを引き出す活動へとつながっていないのではないか、改善できる余地があるのではないか、ということが見えてきた。参加者自身が気付いていない部分も多くあるように感じる。

また、第4回講習会では、第3回講習会の結果を踏まえ、より参加者体験型の実践的な活動を行った。それにより支援者同士が実践を共有する機会が非常に少ないことが分かった。様々な工夫を凝らした活動があるにもかかわらず、身近なリソースから得られる学ぶ貴重な機会を逃していたのは残念である。

地域の日本語教室に求められるものは、さまざまであると思われるが、児童生徒の日本語サポートが肝心要であることは間違いないだろう。今後は、講習会の参加者たちのニーズを見極めつつ、目的を意識した日本語学習活動や学習意欲を引き出す方法の実践練習など、日本語教師として培った経験を活かしながら、協力していきたいと思う。支援者同士が実践を共有できるような仕組み作りなど、地域と連携してできることも多くあるように思う。日本語教師としてできることは何か、さらなる地域連携の可能性をさぐっていきたい。

### 【注】

- 1 令和4年度 文化庁日本語教育大会（WEB大会）文部科学省総合教育政策局 国際教育課 参照
- 2 山武市ホームページ 参照
- 3 「千葉・山武市にスリランカ人が急増、10年で13倍に…児童生徒の1割超える学校も」『読賣新聞オンライン』2023. 3. 20 参照
- 4 9月14日に行われた日本語教室担当者会議にて、山武市教育委員会より配布の資料 参照
- 5 第1回と第2回は本学の林千賀教授が担当し、第1回は「やさしい日本語」について、第2回は、「外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメント」について講義及び参加者とディスカッションを行っている。

### 【参考文献】

令和4年度 文化庁日本語教育大会（WEB大会）文部科学省総合教育政策局 国際教育課 [https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo\\_nihongo/kyoiku/taikai/r04/pdf/93855301\\_06.pdf](https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kyoiku/taikai/r04/pdf/93855301_06.pdf)（2023-10-22閲覧）  
山武市ホームページ <https://www.city.sammu.lg.jp/>（2023-10-22閲覧）  
長原敏夫「千葉・山武市にスリランカ人が急増、10年で13倍に…児童生徒の1割超える学校も」『読賣新聞オンライン』2023. 3. 20 <https://www.yomiuri.co.jp/national/20230318-OYT1T50067/>（2023-

10-22 閲覧)

国際交流基金 日本語教育センター [https://www.jpff.go.jp/j/urawa/j\\_rsrors/o\\_book01.htm](https://www.jpff.go.jp/j/urawa/j_rsrors/o_book01.htm) (2023-10-22 閲覧)

朝日新聞デジタル いちから日本語 外国籍の子を無料指導 全国最多の愛知 2019年6月18日  
愛知県豊川市「こぎつね教室」 <https://www.asahi.com/articles/ASM6K6VXWM6KOIPE02H.html> (2023-6-28 閲覧)

公益財団法人かながわ国際交流財団「国際教室」国際教室の授業とは？外国につながる子どもたちの  
支援のための動画シリーズ <https://www.youtube.com/watch?v=HaErSZLZuq4> (2023-6-28 閲覧)

群馬県伊勢崎市 日本語指導研究協議会による「日本語教室」「はばたけ！ぐんまの子どもたち」群  
馬で学ぶ世界の子どもたち <https://www.youtube.com/watch?v=-zcuPW5Y87A> (2023-6-28 閲覧)

城西国際大学「外国人児童・生徒への日本語教育を強化 山武市と連携協定締結」

<https://www.jiu.ac.jp/news/detail/id=13289> (2023-10-22 閲覧)

総務省「多文化共生の推進」[https://www.soumu.go.jp/menu\\_seisaku/chiho/02gyosei05\\_03000060.html](https://www.soumu.go.jp/menu_seisaku/chiho/02gyosei05_03000060.html)  
(2023-10-22 閲覧)

文部科学省委託「日本語指導が必要な児童生徒等の教育支援基盤整備事業（動画コンテンツ開発）」

研修用 動画コンテンツ 3 日本語指導の方法 1 サバイバル日本語・日本語基礎プログラム

[https://www.mext.go.jp/content/20210412-mxt\\_kyokoku-000014129\\_03.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210412-mxt_kyokoku-000014129_03.pdf) (2023-10-24 閲覧)

外国人児童・生徒用日本語指導テキスト「たのしいがっこう」

[https://www.kyoiku.metro.tokyo.lg.jp/school/japanese/tanoshi\\_gakko.html](https://www.kyoiku.metro.tokyo.lg.jp/school/japanese/tanoshi_gakko.html) (2023-10-24 閲覧)

[https://www.kyoiku.metro.tokyo.lg.jp/school/japanese/files/tanoshi\\_gakko\\_04/4\\_09.pdf](https://www.kyoiku.metro.tokyo.lg.jp/school/japanese/files/tanoshi_gakko_04/4_09.pdf) (2023-10-24 閲覧)

文部科学省「外国人児童生徒受入れの手引き」

[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/clarinet/002/1304668.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/002/1304668.htm) (2023-12-14 閲覧)